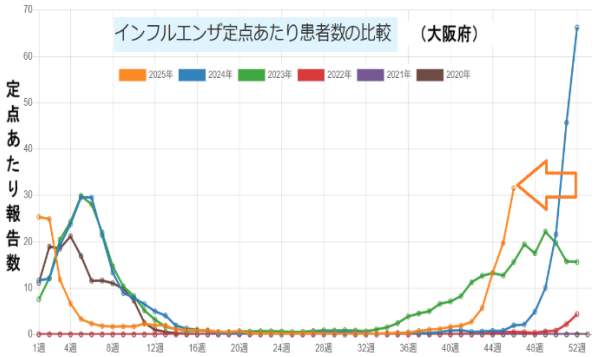
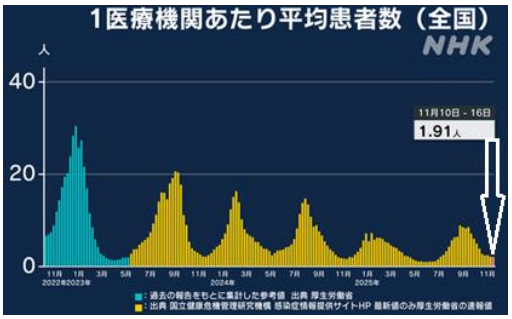
インフルエンザの猛威とワクチンについて／自転車に青切符





今シーズンのインフルエンザは例年より早く、大阪では 9 月下旬に流行期入りしましたが、その後も感染は急速に拡大しており、11 月 16 日までの 1 週間で 31.57 人（前週 19.74 人）と警報レベル（30 人）を超えました。大阪府内では、南河内 44.83 人、北河内 40.45 人、大阪市北部 34.40 人、堺市 32.64 人が警報レベル越えです。全国的にも広がっており、関東や東北などでは警報レベルを大きく超えて猛威を振るっています。手洗いやアルコール消毒をこまめに行い、マスクを着用し人混みを避けるとともに、空気が乾燥していますので加湿を心がけてください。抗ウイルス薬は発症後 48 時間以内で効果が期待できるので早期の受診が必要です。

新型コロナウイルス感染症の定点あたり報告数は、11 月 16 日までの 1 週間で、全国が 1.91 人（前週 1.95 人）、大阪 0.96 人（同 1.12 人）と減少ですが、半分位の道府県で増加が始まっており要注意です。

大阪で 16 日までの1週間で高水準な他の感染症は、感染性胃腸炎 3.74 人（前週 2.98 人）、A 群溶連菌咽頭炎 1.58 人（同 1.39 人）、RS ウイルス感染症 1.17 人（同 1.26 人）です。風邪なども含む急性呼吸器感染症は 65.41 人（同 53.77 人）と急増しています。

投与方法	点鼻	皮下注射
種類	生ワクチン	不活化ワクチン
年齢	2～18歳	6か月～
接種回数	1回	1～2回（年齢による）
痛み	**なし**	あり
接種料金	**高い**	安い
予防効果	**同等**	
ウイルス株	A型2種　B型1種	A型2種　B型2種
効果発現	2週間	2週間
副反応	鼻汁、発熱等	接種部位の腫れ、発熱等
注意点	・妊婦・乳児のいる家庭 ・喘息がある ・アスピリン内服中 ・抗原検査が陽性となる	

こどものインフルエンザワクチンについて等

インフルエンザの予防接種は任意接種ですが、日本小児科学会は接種を推奨しています。従来の注射で接種する不活化インフルエンザワクチンの場合、「生後 6 ヶ月～12 歳（13 歳未満）の子どもは 2 回接種する」ことを推奨しています。13 歳以上は基本的に 1 回接種です。また 2024 年から、2～18 歳の子どもを対象に、鼻に噴霧する点鼻薬タイプの生ワクチンも接種できるようになりました。こちらは生ワクチンで獲得できる免疫力が強いため、シーズン中に 1 回の接種で良いとされています。経鼻生ワクチンでは他のワクチンとの間に接種間隔を空ける必要はありません。接種後 2 週間でワクチンの効果が得られるとされています。

生後 6 ヶ月未満の赤ちゃんは、インフルエンザの予防接種を受けることはできません。ワクチンの効果や副反応に関するデータが十分でないこと、生後半年頃までは母体から受け継いだ免疫によって感染症にかかりにくいことが主な理由です。薬では1回の内服で済むゾフルーザが錠剤のため乳幼児には使えなかったのが、顆粒製剤も発売されて使えることになりました。但し小児科学会の 11 歳以下への推奨は使用経験豊富なタミフルとなっており、1 日 2 回 5 日間の服用が必要です。

道路交通法改正について

道路交通法改正により、来年 4 月より自転車でも青切符を切られ、反則金を納入する必要があります。図に示すような危険運転（ただし基準を満たした自転車に幼児を乗せての 2～3 人乗り、13 歳未満の歩道走行等は認められる）は現在でも法律違反ですが、4 月以降は厳しく取り締まりが行われる可能性があります、違反しないよう、事故にあわないよう、早急に安全運転を心がけましょう。また努力義務で罰則はありませんが、ヘルメットの着用を心がけましょう。

2025 年 11 月 24 日　　産業医　井戸正利